

人・街・ながた 震災資料室ニュース

2008. 8. 17

発行人 寿 広文

編集人 武川泰恵・藤原美紀

真陽小リレー日誌など

自治労長野の皆さんから提供される

8月18日から3日間、長野県で聞き取り調査を行った。

自治労長野の皆さんは、震災当時2,300人が避難された真陽小学校での避難所運営や、区役所での義援金業務に携わられた。当時の貴重な体験を綴った日誌や手作り資料を保存されており、このたび資料室へ寄贈があった。秋に震災資料室展で展示・公開する。

聞き取り調査

聞き取り調査は、長野県北部の飯山市・信濃町をはじめ南の飯田市までの9市町と自治労県本部の22人に行った。

個々人の発言内容と分析についてはテープ起こし後になるが、共通している点は次の事柄である。◎応援要請には自分から積極的に応募している（TV報道等を見て「行かなければ」と思った）◎業務に当たってストレス等は感じなかった◎個人で作成・収集した資料を大切に保管している◎再度神戸を訪れている◎以後に起こった大災害についてボランティア・応援派遣に積極的に参加している。

今後の作業は聞き取り内容やいただいた資料を元に当時の真陽小学校の状況を時系列に整理していく。

今号では、上田市と飯山市での聞き取りを報告する。（裏面）

訪ねてこられます

9月4日（木）

茨城キリスト教大学 稲垣ゼミ

JICA研修生と交流

中東・東南アジアの8ヶ国9人がJICA研修のため、昨年に続き資料室を訪れた。神戸市消防局が独立行政法人国際協力機構（JICA）と3ヵ年計画で「防災福祉コミュニティ」研修を実施している。

研修内容は約1ヶ月の間、多方面・多岐にわたり、専門分野が多い。研修生の職業も医師から消防官、コミュニティ啓蒙担当官など様々だ。

資料室では、震災当時の様子をパネル、ビデオ（当時広報課・松崎氏撮影）を使って説明した。震災を目の前で記録した映像は、その映し出される被害の激しさに全員の視線をとらえていた。

現在、消防局が各小学校校区にたちあげ育成・活動している

「防災福祉コミュニティ」が当時においても小学校が避難所の中心となった経過

等を蓮池小学校の事例などで紹介して終了した。

研修の皆さんお疲れ様でした。



上田市 県中央部からやや北東にあり、上田盆地全体に広がった市域を千曲川が二分するように流れている。気候は県内では比較的温暖で、降水量が少なく少雨地域である。明治の頃は養蚕業の中心で、多くの外国人技師や宣教師が招かれ、その歴史を感じさせる建造物も多い。また上田城下でも有名だ。

お話を伺ったのは、小山秀永さん、佐藤安則さんのお二人だ。派遣時期は小山さん（震災当時丸子町役場・2006年上田市と合併）は2月17～24日、佐藤さんは3月19～31日で自治労派遣の中期から終期にあたる。真陽小学校では、自治組織が機能し始め、自主運営を手助けする立場であった。物資・食事の運搬、夜警などが主な業務だった。時間を見つけては、子供たちと遊ぶこともよくしたという。お二人が共通して感じられたのは「秩序があった」ということだ。

佐藤さんは「現地を見て、街とはこんなになるものなのか」当時都市計画課に所属しており、災害に強い街づくりについて考えさせられたという。そして派遣後、「出来る時に出来る事をするだけ」と、災害時のボランティアに、多く参加されている。

小山さんは「においと焼跡が強く記憶に残っている。あの状況でジョークを言う人がおり、たくましさに驚いた」、現地で知った救援物資の過不足等のアンバランスについて、「支援する側の支援の仕方は課題だ、物資だけでなく人数などもそうではないのか、現地の情報収集の必要性は大きい」と話された。そして、ご自分でまとめられた報告書を寄贈くださった。

小山さん、佐藤さん、そしてお世話してくださった上田市職労様、名物の蕎麦をご馳走になり、ありがとうございました。（武川泰恵）



飯山市 長野駅から北へ JR 飯山線で約50分、新潟県との境に位置し野沢温泉村、木島平村などと隣接しており、スキーなどウィンタースポーツのエリアとして知られた地域でもある。当日、飯山駅に降り立つとさわやかな涼しい風と澄んだ空気に包まれていた。

飯山市職の事務所では清水惣子さんと書記の石田さんに出迎えいただき、挨拶もそこそこに早速当時のお話をいただいた。

震災当日のテレビ報道で、生田神社の神殿がつぶれているのを見て「これは行かなきゃならない」と思った。これだけの被害が出ているから自治労から要請があるだろうと要請を待ち、2回目の要請で応援業務に入った。

大阪で一度集合した後、東海道線で行けるところまで行って、あとは歩いて宿泊所となっていた舞子ビラに到着。翌日から真陽小学校で業務、という流れ。24時間勤務。仕事は分担制というより、手が空いたら次の仕事に入る、忙しいところに廻るといった感じ。

また、自治会の統制が取れていたので特に困ったと思うことはなく、避難所の住民の話し相手、子供の遊び相手などしながら業務にあたった。

そんな中での一番の記憶は、「お前ら帰る家あるやろ」と言われた事。この言葉は確かにそのとおりで返す言葉がなかった。

身も蓋もない言葉だが、ここにいる避難者が将来への不安を感じて発した言葉であると理解し、『入り込み過ぎないように、でも何かできないか』との思いで業務にあたった。

業務明けの休憩時は真陽小周辺から淡路島まで、見に廻ったが、家の造りが雪国の家のようにしっかりと造られていない（開口が大きく柱が細い）から潰れたのではないかと、思った。1週間で次の班と交代となったが、この位のスパンがちょうどよかったかと思う。

飯山に帰った後、この経験をもとに突発で何かあったときを意識して仕事している。

写真の寄贈もいただきありがとうございました。（田村彰啓）